

二十一世紀は、人権の世紀といわれています。幸せに生きるための権利である基本的人権が、全ての国民に保障され、差別や偏見をなくし、真に平和で幸福な社会が実現されることに大きな期待が寄せられています。

ところが、私たちの現実の生活の中には、女性・子ども・高齢者・障がい者・同和問題・外国人・刑を終えて出所した人・性的少数者（セクシュアルマイノリティ）などに対する差別やインターネット等による人権侵害など、早急に解決を図らなければならない問題があります。町では、すべての人の人権が尊重され、誰も傷つかない、誰も傷つけない、そして誰もが生きがいをもって生活できる、人権が擁護されたまちづくりを推進し、もってあらゆる差別のない社会を実現するため、平成二十九年三月三十一日に「あらゆる差別の撤廃をめざす人権擁護条例」を施行しました。その後さらに「大泉町手話言語条例」や「大泉町犯罪被害者支援条例」を施行しています。

また教育啓発活動としては、町ぐるみ人権教育推進大会や人権教育指導者養成講座、地域単位でのふれあい人権啓発促進活動、人権問題学習会等を行っており、いろいろな場面で町民の皆様とともに考える機会をもつけ、一人ひとりの人権が尊重される町づくりの実現をめざしています。

町内の小・中学校でも、「人権教育の充実」に重点をおき、生命や人格を尊重する、他人を思いやるなどの豊かな人間性や、差別や偏見をなくすための実践力をもった児童生徒の育成を図っています。

小・中学校の児童生徒は、ポスター・標語・作文を作成することで、学校で学習した人権の尊さについて見つめなおし、それぞれの思いを表現しています。町では、そうした作品の中から各校の代表を選び、東朋産業いずみの杜の回廊や町公民館のロビーに展示して町民の皆様にご覧いただくとともに、各学校に巡回展示をしています。

この冊子は、小・中学生がどのように人権について考え、どのような願いをもち、どのように解決しようとしているかを、さらに多くの町民の皆様を知っていただくために、その作品の一部を掲載したものです。

皆様の人権について考える上で、この冊子が、少しでも役に立つことを願っております。

## 知っていれば怖くない

大泉町立南中学校 一年 間 普 遥

去年の冬、私はあるニュースを見た。人種や国籍などを理由に警察官から何度も職務質問を受けた人が、これを差別だとして訴えを起こしたというものだった。

訴えを起こしたのは外国出身の男性三人で、日常生活を送る中で繰り返し職務質問を受けたり、「外国の方が運転しているのは珍しい」と言われたりしたそうだ。こうした人種や国籍などを理由に相手を選ぶ取り調べは「レイシャルプロファイリング」と呼ばれ、国際的な問題となっている。

そのニュースを見て、まず私が思ったのは、「外国人というだけで、そんなに怪しく見えるかなあ」ということだった。私の周りには外国籍の友達が多くて、あまり国籍の違いを問題に感じたこともなかった。その影響もあって、なぜこのような状況になってしまうのか、よく分からなかった。

次の日、学校でそのことを友達に話してみた。すると、友達はこう言った。「日本人同士でも、仲良くなるにはそれなりに時間がかかるし、お互いのことを知らなきゃならないでしょ。日本人と外国人も、きっと同じようなものだよ。」

その子は日本人だったけれど、会ってすぐ仲良くなったわけではないし、けんかしたこともあったから、何だか納得した。

外国人と日本人は、言葉も身体の特徴も考え方も違う。だからどうなるかわからない、できれば関わりたくない……そう思っていれば、差別や問題が起きてしまうのも当然だ。あの時見たニュースも、「外国人だからこういうことをするかもしれない」という考えが根底にあったから起きたものかもしれない。だとしたら、こうした差別を無くすためには、「知る」ことが何より大

切なのではないだろうか。

こんな国があつて、こんな暮らしをしていて、過去にはこんなことがあつたと、「知る」ことが。他にも、その国の名物やイベント、有名人などでもいい。「知る」ことで、外国人と日本人は別物、うまくなじめない、という思い込みもなくなつて、同じ一人の人間として感じられるようになるのではないだろうか。

相手をよく知らないで、「こんな感じだから、きつとこんな人だ」という思い込みに頼るしかなくなり、差別につながつてしまうと、私は考える。私は相手の国のことも、相手そのものこともよく知つて、差別のない人間関係を築けるようになりたい。

## いじめについて

大泉町立南中学校 一年 吉 井 駿太朗

僕はいじめをされたことはないけれど、テレビである子どもがいじめを受けて自殺してしまったなどの、ニュースを見ることがよくあります。

一言でいじめと言っても、いろいろな種類があります。スマホなどでの仲間はずれ、対象者がいないなかで悪口を言う、直接暴力をふるうなど他にもたくさんあります。時には、人の命をうばうほどとても危険なことなんだなと僕たちはよく知る必要があります。いじめはその場のノリで軽はずみに集団で行つたり、冗談やおふざけ半分で行つたりすることが多いといわれます。でもそのちよつとしたふざけや楽しんでいたことが相手にとっては、傷ついたり悲しい気持ちになつてしまうことにつながるのです。人権ポスターなどにも、「助けてと言おう」などの題名で書いているものも多いけれど、いじめ

をされている本人は、助けを求めることは難しいのではないかと思います。もし助けてなどと言ったらいじめがエスカレートしてしまうと思ってしまうからです。助けを求めるには、とても勇気がいることなんでしょうなと思います。だから僕は、友達の元気がないと感じたときは積極的に「何かあったの」と聞くようにしています。しかし見かけたときに、ぼうかん者にならず、まわりの人に言ったり、その人に声をかけたりすることは助けを求めることと同じで、とても勇気がいることです。そして関係ないふりをすることはとても簡単なことです。でもいじめをされて苦しんでいる人の気持ちを考えたら、声をかけることが大切で救うための方法だと思います。だからまず自分からそういうところを見かけたときはちゅうちよせず声をかける強い心を持ちたいと思いました。

これは、最近増えている「ネットいじめ」でも言えることだと思います。さらにネットでは、顔も名前も分からないので、とてもおそろしいと思います。言葉が文字になる分、誤解を招いたり、書きこまれた言葉が広まったりもしてしまいます。必ず送信の前に言葉をチェックし、自分の気持ちだけを伝えるのではなく、相手の気持ちを考えることを忘れることがないようにしたいです。

この世から、いじめをなくすことは無理かもしれませんが、人の気持ちを思いやる心を持ち、身近なことから一つ一つ変えていけば、きっと苦しんでいる人をへらせると思います。

## 心に残る深い傷

大泉町立南中学校 二年 澤田 莉弥

「あんななんか産まなければよかった」という言葉を聞いたことはあるだろうか。私はドラマや、漫画、様々な場面でこのような残酷な言葉を見聞きしたことがある。私は人権作文を書くうえで、このような、子どもの人権が侵害される環境とはどのようなものがあるのか疑問を持ち「児童虐待」について調べることにした。

多くの児童虐待は、親の育児へのストレスが原因に挙げられる。つまり、児童虐待というのは親の八つ当たりだと私は思う。

児童虐待は四つに分けられている。一つは、殴る、蹴る、刃物で切るなどの身体的虐待。次に、子どもに性的なことをさせる、または、性的な行為の強要などの性的虐待。次に、家に閉じこめる、食事を与えない、また成長するうえで、最低限の必要とされている環境などを与えない行動などのネグレクト。最後に言葉で脅す、無視や拒否的な態度をとるなどの心理的虐待だ。あまり知られていないが、心理的虐待には、子どもが夫婦間でのDVを目撃してしまうのも心理的虐待に入るのだ。

このような児童虐待の相談数は、調べてみたところ、一九九〇年度から三十四年連続で増えていて、前年度より、一万一五〇〇件増加していることがわかった。

しかし、なんの理由もなく虐待を行っているのではないと私は思った。そこで私は、子どもの立場ではなく、一度、親の立場になって考えてみることにした。子どもを二十歳まで育てるのに、二千万円〜四千万円程度かかると言われている今の世の中、金銭的に厳しいと思うこともあるだろう。それだけではなく、育児の大変さをわかってもらえず孤立し、精神的苦痛に陥って

しまい「子どもなんか要らない」と思う母親が多いと思った。このような思いから、児童虐待や、子殺しをしてしまうと私は考えた。

そのような問題を解決するためには、母親だけの育児にするのではなく、「社会全体」が子ども一人を守っていくという意識を忘れず、私たち中学生も周りの子どもの変化に気づくということが大切だ。たくさんのあざや、切り傷。目に見える傷だけでなく、落ちこんでいたり、泣いていたり、「心の傷」に気づいてあげることが私たちがしなければいけないことだ。

虐待を受けた子どもは、切り傷のように時間が経てば治る傷だけでなく、他人の目には見えず、消えないで心に深く残る傷を一生背負って生きていかなければならないのだ。そんな子どもたちの苦しみを全て理解することは私には難しいが、手を差し伸べ、話を聞いてあげたいと思う。そして、もし、私が結婚して、子どもができたときには、自分が母親にもらった愛を忘れず、大切に育て続けたいと思う。

## 大切な命

大泉町立南中学校 二年 井上 未莉

私がテレビを見ていた時、突然十四才の男の子が自宅アパートから飛び降りたというニュースが流れた。私は、衝撃を受けた。なぜなら、私達と歳の近い子がどうしてだろうと思ったからだ。その子は、学校でのいじめが原因だった。同級生達が殴ってくる。物を盗られたり、壊されたりする。そんな日々が毎日続くと考えるととても胸が痛くなる。その子をはじめていた同級生達は、遊び感覚でやってしまったようだ。けれど、いじめてしまった同級生達がやってしまった事実は、変わらない。最初は、遊び感覚でやっていて

も、だんだんとエスカレートしていく。そうするうちにもう後にひけなくなってしまう。途中でだめなことをしていると気がついて、自分もあの子と同じようにいじめられてしまうのではないかという恐怖があつてなかなか行動ができないのだと思う。それは、周りでいじめを見ていた傍観者と同じ。自分がいじめられないようにするので精一杯なのだと思う。いじめっ子達に逆らつたらと思うと不安でつらいと思う。けれど、一番つらいのはやっぱりいじめられている本人だと思う。いじめに一人で耐えるのはかなりつらい。だからこそ、近くにもしいじめられてる子がいたら、いじめに加担することや傍観者になるのではなく、自分にできることをやっていこう。例えば、いじめを止めたり、たとえ止める勇気がなくて止められなくても、相談にのったり、先生に伝えたりすることもできる。どんなささいな行動でも、いじめられている子の力になれるのではないだろうか。いじめられている子に力を貸してあげることはいじめを一人で耐えているのではなく、一緒に耐えることができるから少しは力になれると思う。

私は、今までいじめについてそんなに深く考えていなかったが、このニュースが流れてきた。学校でのいじめが原因で亡くなってしまふ事件のことを忘れずにいたい。今でもいじめによつて苦しんでいる子たちがいるということも忘れてはいけない。もし、そのような子を見かけたら、自分の力を貸してあげたい。その力で、いじめられている子が少しでも楽になつてくれたらうれしい。この事件のようないじめが原因で亡くなってしまった人達もいる。だからこそ、少しずつでもいいからいじめをなくしていきたいと思つた。そうするために自分にできることを考えていきたい。

## いくつになっても「自分らしく」

大泉町立南中学校 三年 塚原 めぐみ

「認知症だからにもできない。」

その言葉を聞いたとき、私はとても疑問に思いました。本当にそうなのでしょうが。

私には、今では施設で生活をしている、認知症の親戚がいます。施設で生活をする前は、症状がとても重い状態で、気分が悪いと心が落ちつかない様子でいたり、ご飯を食べたこと自体も忘れてしまっていたりなど、物忘れや被害妄想がとてひどい状態でした。

そんな親戚と会うことができる日数は、施設に入ってから急激に減ってしまいました。自分と親戚とのスケジュールがあい、久しぶりに会えた日がありました。久しぶりに会えた親戚は、いくらか表情が柔らかくなっていたし、私のことをちゃんと覚えていてくれました。私は昔から親戚とお話することが好きだったので、学校生活のことや、友達との話をたくさんしました。

そこで、親戚を通して「認知症」についてもっと知りたいと思うようになりました。調べてみると、認知症の方が主に働く「注文をまちがえる料理店」という料理店の存在を知りました。その料理店は、その名の通り、オーダーや配膳を時々間違えてしまうレストランで、ホールスタッフは全員認知症という、とても珍しいものでした。そんな中、私はこの料理店で特に感動したことがあります。それは、

「まちがえちゃったけど、まあいいか」というコンセプトでした。私はそれを見た時、なんて素敵な言葉なのだと、

感動したのを覚えています。よく「間違えることは悪いこと」という人もいますが、私はそうは思いません。誰にだって間違えてしまうことはあるのだから、間違いを受け入れて、むしろ一緒に笑い合えたら、お互い嫌な気持ちにならずに済むのではないのでしょうか。

人を支えることができるのは、人だと私は思います。年を取ったとしても、その人はその人であり、価値が下がるなんてことは、あってはいけません。認知症の他にも、性別や病気などの様々な事柄で制限するのではなく、すべての人が自分らしく生きることができたら、みんなが笑いあえる幸せな社会になるはずですよ。家族が繋いでくれていて命を大切に、支えてくれていて人達への感謝の気持ちを忘れないで、倍で恩返しができるようにしていきたいです。

## 人権について

大泉町立北中学校 一年 河田 望花

みなさんは『人権』について考えたことがありますか。人権とは誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利です。私は今まで人権について深く考えずに生きてきました。ですが今回のテーマが人権ということなので、私なりに人権について考えてみました。

まずインターネットを使って、身近な人権問題について調べてみました。世間では様々な事柄が問題視されているということがわかりました。その中でも『外国人への差別』という問題に目が留まりました。私はあまり外国人だからどうという意識がなく、むしろ気が合い明るいイメージがあつて好きです。それは小学校からあたり前のように、外国人の友達と関わっている

からだと思いました。そのころは人数が少なく、男女共の比率もかなり大きく、外国籍の子がたくさんいました。親の世代は、外国人が一人か二人くらいだったそうで、今と比べると全然違うと言っていました。私が小学生のころは、外国人とか性別が違うとかそんなことは考えず、クラスメイト・友達・一人の人間として、たくさんの人と関わってきました。それは中学生になったから変わったわけではありません。むしろ違う小学校だった子たちと一緒にになり、もっとたくさんの子と話してみたい、仲良くなりたいと気持ちが高まりました。入学前は不安でいっぱいだったけど最初だけなんだと実感しました。これまでの経験の中で私はこう考えました。私達の世代は親世代に比べて、外国人というイメージが全く違うのではないかという事を。昔と今では外国人の人口の割合が増え、社会が大きく変わっています。私たちは子供のころからその様子が、あたり前として生活してきましたが、大人達は外国人がめずらしいのがあたり前の生活をしてきたので、『外国人がたくさん日本で見られる』という昔ではあまり考えられないような世の中になっているからこそ、外国人への差別が問題になっているのではないのかと思います。だから昔ばかりにとらわれず現代の新しい考えや生活、技術などを理解していくことで改善されていくのではないかと思います。これは『外国人への差別』だけではありません。子供や高い者、障がい者など様々な人権問題に関わってくる事です。ここ最近は少なくなってきましたが、コロナにより感染者やその家族、医療従事者などに対しての差別やいじめなどが一時期ニュースになっていました。私はそのニュースをみてどうしたらそんなことができるんだと思いました。コロナにかかってしまうのは予防しても、防ぎようがない場合だってある、ましてや自分が感染したとき同じようなことをされて嫌じゃないのか、どうしてそんなことも考えられないのかと不思議でした。そして自分が感染するリスクが高いけれど、命や困っている人を助ける医療従事者にまで差別を行う人間がいるということが信じられませんでし

た。今はそういった差別が少なくなり、昔より改善されていると思います。現状まだまだ人権問題が解決されていませんが、多様性の社会を目指そうとしている今、解決されていくのもそう遠くはないと私は思っています。

## その当たり前はみんなの当たり前か

大泉町立北中学校 一年 宇口 結 絆

学校で聞こえる言葉、テレビから聞こえる言葉に時々「そうなのかな？」と思う言葉があります。それは「普通さ」という言葉です。「普通さ、〇〇じゃない」「普通いわないよね」など改めて振り返ると良く耳に入ってくるなと思います。「普通さ」という言葉について身近な大人の人が話しているのを聞いて、私は、なんとなく気持ちの良い言葉ではないのだと思ったことを覚えていきます。普通って何だろう。普通って何を基準に普通って何だろう。そんな風に思いました。ある時「普通そんな所にいられないでしょ」と言われた行動の場面では普通というよりも、そこまで考えられなかった自分がいきました。言われて「そうか、こうなる予想をしたから、そう教えてくれたのだ」と学ぶことがありましたが、その経験がなかっただけの私だったので、そんな時は、「普通」を使うのではなく、違う言葉に工夫すればよいのだと思えました。

普通って何だろう。外国と日本では考え方や取り組み方も違います。日本でも住む場所によって風習も違います。生まれた環境や育った環境でも違います。だから、「普通は」という言葉は自分にとっては普通でも、相手にとっては違う時があるのだと考えました。普通イコール当たり前だと思っから言ってしまうですが、でも相手はそう思っていないとも言われてしまうと「自

分は間違っているのかな」と自信がなくなったり、次の言葉が出せなくなったりしてしまうことがあると思います。

これから、クラスや部活など様々な活動の中でたくさんを経験をしていきます。そこでは、自分の思いを伝えなければならぬことがあったり、友達の意見を聞いて進めたりしなければなりません。その時は、一人一人の言葉には間違いがないということ、その意見を大切にできるような言葉の掛け方や聞き方がとても大切になると思います。自信を持って言葉を伝えられるように工夫していく力をつけていきたいと思っています。

私は「口に出した言葉は消しゴムでは消すことができないんだよ」「思ったままを言葉にすると相手はもちろん、自分も苦しくなるときがあるから、自分が言われたらどう思うかを考えてね」と教わってきました。その教わってきたことも私にとっては普通だけど、周りの人にとって違うことを忘れずに、一人一人が違うのは当たり前だという事を大切にしていけるようにしていきたいと思っています。

## 優しい言葉の連鎖を

大泉町立北中学校 二年 宮崎 心菜

「インターネット」それは暮らしが便利になったり、様々な人と繋がれたり、何かを調べたりする事ができるなど必要不可欠なもの。しかし、それは時に誰かを苦しめ、傷つける凶器にも変貌してしまうものだと思います。

私は、今まで「人権」という意味を詳しく知りませんでした。人権とは、「誰もが生まれながらにして持っている、幸せに生きていくための権利」です。誰もが持っているこの人権を大切にするという事は、日々の何気ない生

活の中でも意識して考えていないと、知らない内に相手の人権を侵害していたという事になる恐れもあるのではないかと思います。

ここ数年、ニュースなどで「自殺」という言葉を目にします。学校や職場でのいじめ被害やSNSでの誹謗中傷などが原因で、命を絶ってしまう人が多くいます。そんなニュースを目にする度にとても胸が苦しくなります。

「言葉の刃」という表現があるように、何気ない気持ちで言った言葉が時に人を傷つけ、時に死に追いやる事があると思います。私は相手の人権を傷つけないために、特に意識している事があります。それは、友達とメールをする時です。普段面と向かってなら言える軽い冗談、例えば「あほやね〜」などといった言葉も、顔の見えないメールでは、どんなに仲がいい友達であっても書かないようにしています。なぜなら、対面ならお互いの表情や言い方、その場の雰囲気、それが冗談なのか本気なのか大体分かると思います。が、メールになるとそれが分かりません。なので、自分の書いた言葉が知らない内に相手を傷つけてしまわないように気をつけています。

しかし、今一番の問題はSNSでの誹謗中傷だと思っています。不特定多数の人から言葉の集中攻撃をされ、命を絶ってしまう人も少なくないからです。

ある芸人の方がSNSで、「私はSNSでは明るい言葉を発信したいと思っています」とつぶやいていました。この方は少し前に、自分のつぶやきに対して心ないコメントをされ、炎上した事がありました。とても悲しくなつたと思いますが、そんなコメントに対抗せず、明るい言葉を発信し続けていました。とても強い心を持つている人だなと感じ、この芸人さんの過去のSNSを見てみると、本当に見ている人が明るく笑顔になるような投稿ばかりで、私も元気をもらえました。そして発信した明るいつぶやきに対して、優しく温かい言葉がたくさんコメントされていました。私は、優しい言葉が連鎖していくそんな素敵な世界がSNSにも広がってほしいなと思いました。

これからの社会、誰もが幸せに生きていくための権利を奪い、奪われない

ようにするために、私自身も言葉の使い方に気をつけ、この人権の持つ意味を忘れずに生活していきたいと思えます。

## 互いに

大泉町立北中学校 二年 久保田 姫 莉

私が住んでいる大泉町には、外国人が多い。小中学校も、クラスに何人かハーフの子がいた。幼い頃から一緒なので、特に違和感なくこれまで過ごしてきた。大きな問題もなかったのは素晴らしいことだと思う。ニュースや本で、外国人の方によって「差別をされた」という経験が語られているのを見たことがある。差別。偏見などによって差をつけて一方を扱うこと、と辞書には載っているが、どうだろう。相手が何かされて嫌な気持ちになることは「いじめ」であると私は思っている。そのような現場は見たことはない。しかし、心の中で「あまり外国人と関わりたくない」と思ってしまったことがある。それはなぜか。

ある日、テレビで、富士山を観光しに来日した外国人観光客の様子を見た。日本の象徴でもある富士山を見に来てくれるのはとても嬉しいことであるが、それによる問題もあった。外国人観光客が、写真を撮ろうと危険な場所へ行って事故が起こりそうになったり、ゴミのポイ捨てが多くなったり、といった問題である。このような行為は確かにやめてほしいが、これだけの視点から見て「外国人は危険だ」というような考えになってしまうことがある。全ての人が迷惑行為をしている訳ではない。日本のことが大好きな人だっている。「外国人」というまとまりにして、偏見を持つのはよくないと思う。

私には外国人やハーフの友達がいるが、その人達はみんな、楽しそうに学

校生活を送っている。学年の中でも目立つくらい元気な人や、可愛い人もいる。日本人ともよく一緒に遊んだり話したりと、積極的に関わっている人はいいのだけれど、そうでない人もいる。日本語を話すのがまだ難しい人達は、同じような人どうしでグループを作り、日本人の生徒と距離を作ってしまうのだ。私はそのような人とはあまり関わってこなかった。しかし、これからはグループ活動で一緒になってみたり、話しかけたりと歩み寄ろうと思う。そうすれば、相手もだんだん心を開いてくれるだろう。

私達にできることはたくさんある。相手はこちらの生活に慣れるよう努力している。互いに歩み寄り、もつと関わっていけば、きっと「差別」が起こることも、偏見を持つこともなくなる。笑顔を作る、言葉を学んでみる、一緒に行動する。小さなことで喜ぶ人がいる。「人権」という言葉を心の中に入れて、これから生活していきたい。

## 人権について考える

大泉町立北中学校 三年 ビダル キルベル

私たちの日常生活の中で、何気なく過ごしている日々にも、さまざまな形で人権が関わっているのです。普段は気づかないかもしれませんが、私たちが尊重され、大切にされると気づく瞬間こそが人権が守られている証拠です。しかし、時には人権そのものが軽視されることがあり、その本人とその周りの人々が悲しい思いや辛い思いをしていることがあります。

私の弟が、同級生のある一人にいじめを受けていました。弟は学校に行くのが嫌になっていき、日を追うごとに笑顔が無くなっていきました。最初は何とも思いませんでした。ただ弟の元気が少し無いただけだろうと軽くみてい

ました。でも、そんなある日、

「もう学校に行きたくない」

と言ったとき、何かおかしいと思いました。明らかにその日は、元気がありませんでした。

弟から話を聞くと、弟が受けていたいじめは、弟の私物を乱暴に扱ったり悪口を言われたりしていたそうです。最初は特に気にしていなかったそうです。それが毎日続くと我慢できなくなっていきました。本人は悪ふざけでやっていたようですが、弟にとっては辛かったそうです。この経験を通して、自分が無意識のうちに誰かの人権を侵害してしまう可能性があることに気づきました。

家族とこのことについて話し合ったことがあります。お母さんは、

「どんな人に対しても、思いやりの心を持つことが大切」

と言いました。この言葉はシンプルですが、深い意味が込められています。

思いやり、相手の気持ちを理解し、尊重することができず。そして、その思いやりが広がれば誰もが安心して過ごせる社会が実現すると思います。

弟のいじめを通して、私は人権の大切さを改めて感じました。私たち一人一人が少しずつでも努力を続けることで、より良い社会を築いていくことができると思います。人権は誰もが持っている大切なものであり、それを守るために私たちができることを日々考えていきたいと思えます。

## 未来へつなぐ手

大泉町立北中学校 三年 渋井 奏音羽

「耳が聞こえないので時間がかかるかもしれませんが」私がとあるカフェに行った時のことです。いつも通り注文をしようと店員さんの前に立ったとき、そう書かれています。私は指でメニューを指しましたが、その中から抜いてほしいものがあつたので、すぐに手に持っていたスマホに内容を書き、その店員さんに伝えました。その日のことを思い出す時はありませんでした。また違う日にカフェに行った時にもその店員さんがいて、とても楽しそうに笑顔で接客している姿を見て、私の心は動かされました。

「人権作文」と聞いて、様々なテーマが思い浮かび何を書こうか初めは迷っていました。そんな時に、カフェで出会った耳の不自由な店員さんを思い出しました。もし、私が耳が不自由だったとしてどのように笑顔で接客をすることはできるのだろうか。そんなことを考えてみたけれど、私だったら一人でできるような、人と関わらない仕事を選ぶと思います。接客業に憧れは持つと思いますが、毎日どんなお客さんが来るかも分からないし、どんなことを言われるかも分からない、何か失敗をして迷惑をかけてしまうかもしれない、そんなたくさんの可能性を考え、諦めてしまおうと思います。これは私だけに限らず、この様な考えをする人はたくさんいるのではないのでしょうか。でも、そんな可能性を考えてしまうような今の日本では、まだ耳が不自由な人に対しての差別的扱いがあるのではないかと思えました。

少し不自由なところがあるだけで、「接客をしたい」、「人と関わる仕事をしたい」そう思うのは私たちと変わりません。私はそのような障がいがある人たちにとって、嫌なことを考えずに好きなことができる、そんな世界になつてほしいと思います。

小学生の頃、手話について学ぶ機会がありました。「ありがとう」や「こんにちは」などの簡単な手話をやってみたり、指文字を真似てみたりしました。手話を使う機会があまりなかったため、覚えた手話について今は忘れてしまいましたが、少しの動作を覚えるだけで耳の不自由な人と会話ができるのはとても役立つと思うし、実際あの時のようにカフエなどで耳の不自由な人に出会って手話で会話することができたら私も相手も嬉しい気持ちになると思います。

周りを見てみると、「自分には関係ない」、「よく分からない」このような考えを持って生活をしている人が多くいるように感じます。でも、それは自分が自身が障がい者を選んでいるから、関係のないものだと感じてしまうし、分からないまままで終わらせてしまうのだと思います。その考えを超えて、手話を覚えてみたり積極的にコミュニケーションをとってみたりすることで世界は広がると私は思います。

お互いを理解し合い、より深くつながるためには、私たちひとりひとりが行動することが大切です。誰もが平等に夢を追いかけ、チャンスをつかむことのできる社会を作るために、一緒に行動してみませんか？

## ユニバーサルデザインとバリアフリー

大泉町立西中学校 一年 佐々木 実 結

ユニバーサルデザインとは、性別や国籍などの違いを大切にしながらできるだけ多くの人が利用できるという考え方がユニバーサルデザインです。

私は身近な物などを見るとあまりユニバーサルデザインが広まっていないと思います。道路や交通を見るとルールをしっかりと守っていない人がいたりします。それによって視覚や聴覚に障害をもっている方や高齢者の方々にと

っては、とっても不便だと思います。こうしたいろんな課題によって一人一人の大切な人権がうばわれてしまう人々がいることをみんなが知り、ユニバーサルデザインが世界に広まるようにすることが自分たちの問題と考え、みんなが生活しやすい町をつくる努力をする必要があると思います。ユニバーサルデザインを増やすといいと思う理由は例えば幼い赤ちゃんをもつ母親はショッピングモールなどでベビーカーを使い移動することがあると思います。小さな段差などベビーカーがあるととても負担になると思います。そのため段差のあまりないバリアフリーな優しい環境は社会的に非常に役立つと思います。ベビーカーの事以外にも車椅子の方も段差がないと移動しやすくなるのでとてもいいと思います。他には車椅子の人がエレベーターを使うとき、ボタンを押しやすくなるために押しやすい高さに配置されている、手すりをつけたりすることでスムーズに乗り降りしやすいようになっていくし、目の見えない人のためにも音声ガイドがついていたり一人一人が快適に過ごせるように工夫されています。

私たちにできることは、身近なところから少しずつ意識を高め、困っている人がいたら見て見ぬふりをせず、積極的に声をかけたりなど自分達にできることはたくさんあると思います。

このように、ユニバーサルデザインとはみんなが利用のしやすい優しい社会をつくるためにつくりたい、一人でも不便のないバリアフリーの考え方をふくめることであって、一人一人が心づかいを補うことがユニバーサルデザインについて考え、私たちの人権意識を高めることができ、快適な過ごしやすい環境、社会を作るための第一歩になると思います。これから身の周りである環境やデザインがすべての人にとってやさしいものであることを願っています。

## 幸せの権利

大泉町立西中学校 一年 大野 愛 梨

みなさん「人権」という言葉を知っていますか。「人権」とは誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利です。

最近「人権」に関わるニュースを私はよく目にします。そのニュースの内容は、見た目や性別などで差別されて、権利を奪われているという内容で、私はあまり人権について、あまり関心がなかったけれどその内容のニュースを見て私にも関係のあることなんだと改めて実感しました。

私はこの作文で二つ「人権」についてまとめたいと思います。  
まず一つめは、見た目や国での差別についてです。

私が通っている学校にはいろんな国の人が通っています。私が小学一年生のときに見た目や国での差別をしてしまいました。少しさけてしまったりあまり話さなかったりしていました。でも話してみると楽しくて、なんで見ただ目で決めていたんだらうと、その時思いました。このようなことはもうしたくないと思います。

次に性別での差別についてです。

今の日本では改善されてきていることですが、昔は「女だから」や「男だから」などと性別という概念でしたい事ができず、なりたい職業にもなれませんでした。

今は、そういった昔の考えを捨て、女性が社長になったり、男性が家庭のことをして、女性が働くのも当たり前になってきました。

私は、まだ中学生だけれども、「人権」について熱心に学びたいし、みなさんに知ってもらいたいと思っています。自分がいつも言っている言葉でも一度考えて、差別していいのかなとか「…だから」などと言っていないかなと

思い出してみてください。言ってしまうたらこれから言わないように気を付けたり、発言一つ一つ意識してするようにしてみてください。

当たり前のように「人権」は一人一人が持っている権利です。大切にしてください。これから楽しくみんなが幸せに生きていきます。

## 差別という言葉がなくす

大泉町立西中学校 二年 鎌田 音色

みなさん差別という言葉の意味を正しく理解していますか。私は詳しく知らなかったので調べてみました。すると「差をつけてあつかうこと」という意味でした。よく「人種差別」などの人の基準からうまれてしまった差を「悪くとらえて認めない」人が勝手に悪ふざけでいじめをしたり、間違った印象をもつことで生まれてしまった差があります。このようなことを無くすために私は何をすべきかを考えました。そこで思ったのは、「LGBTQ」です。最近になってトランスジェンダーなどに関する性の多様性が話題になっています。人間も動物の心も自分しか分からないし、相手に見えるわけでもありません。なので体は男性だけれど心の中は女性だったりする人に気づきづらいのです。だから私は「絶対」をなくすべきだと思いました。「見た目が女性だから制服は絶対スカートだろう」や「見た目が男性だからランドセルは黒だろう」などといった偏見から勝手に判断するのをやめることが差をうまないために必要なことだと思います。特に分かりやすいのが「女性は家事、男性は仕事」という偏見です。家事も仕事も家庭にとって大切なことですが、役割を決めつけることはありません。今では男性でも育休を取りやすくなったり、女性でも高い役職に積極的に就けるように少しずつでも変化していま

す。これは性別だけではありません。例えばお客さんと店員さんの関係です。最近では「カスハラ」という客がお店に対して理不尽なクレーム、言動をすることが問題となっています。これも「お客さんは神様」といった勝手な偏見からうまれてしまっています。なので、お店は理不尽なクレームの場合は対応せず、警察を呼ぶなど、問題を解決できるように変化しています。

このように勝手な偏見や人の基準でうまれた差をなくするには多くの人が意識を変え、社会全体が変わっていくことが大切です。一人の小さな変化でも全員が変わると社会が大きく変化します。今はインターネット、スマホの普及率が高まり、今までになかった差がうまれていますが便利を追求しすぎず人とのコミュニケーションも大切に、相手の心を感じられる、考えられる人が増えていけばいいと思います。

## 笑顔があふれる社会に

大泉町立西中学校 二年 米川 渚那

私が、人権と聞いて、はじめに思いついたのは、いじめのことでした。そして、いじめのことについて考えてみました。

いじめには、いじめる側といじめられる側があつて、いじめる側は、遊び半分でやっているかもしれないけれど、いじめられる側は、苦しかったり、悲しい思いをしていると考えられ、「大丈夫」と言っている、大丈夫ではなく、おいつめられていることがあると思います。

最近では、ネットでのいじめがあると聞きます。顔や名前が分からないからといって、人が不快になることを書いたりします。他にも、ラインなどで送った側に悪気はない文でも、感情がわからない分、送られた側は違う捉え

方をしてしまうということもあります。

そして、私は見て見ぬふりもいじめに入ると思います。自分には関係ないから、自分が巻きこまれてしまうからという理由で、見て見ぬふりはよくないと思います。

実際、その立場になったら怖くなってしまいかもしれないけれど、いじめられている側の気持ちを考えて、助けてあげる行動をしたいと思います。

私がいじめを防ぐために考えることは、相手の気持ちをしっかりと考えたり、思いやりをもって行動することです。ラインを送る前に、文章を読み返してから送ったり、相手の立場になって考えることが大切だと思います。

私はこの人権作文を通して、いじめのない社会にしていきたいと強く思いました。

そして、いじめについて深く考えることができてよかったです。

これからは、自分が被害者や加害者にならないためにも、相手の気持ちをしっかりと考えたりし、意識を持って生活していきたいと思っています。

## 言葉の力

大泉町立西中学校 三年 須永 大貴

今年の夏、パリオリンピックが開催された。僕もバレーボールやバドミントン、卓球など様々な競技をテレビの前で応援した。日本全体が日本人選手のメダル獲得のニュースに沸いた。

その一方で、アスリートに対する誹謗中傷ひぼうという問題も話題になった。リレーに専念するため個人種目の出場を辞退した競歩の選手や、試合に負けて号泣した柔道選手などに対して個人を攻撃するようなSNSの投稿があふれ

た。日本オリンピック委員会は八月一日、「心ない誹謗中傷、批判等に心を痛めるとともに不安や恐怖を感じることもあります」と声明を発表した。また、大会中の選手からも「厳しい言葉に傷ついた」などの発言もあった。

SNSによって、私たちはアスリートや芸能人を身近に感じることができるようになった。そして、遠く離れた場所で競技を行っている選手にも直接メッセージを伝えられるようになった。「頑張ってください」「感動しました」とメッセージを送る人がいる一方で、SNSは匿名だからと暴言を書き込む人もいる。表現の自由は保障されているが、個人の名誉や尊厳、プライバシーを傷つける発言をしてはいけない。アスリート達はオリンピックに向けて、僕たちには計り知れない努力をたくさんしてきた。本当に努力をしている人を目の前にしたら、批判なんて言えないはずだ。

僕は一学期の体育祭の長縄跳びで、先生やクラスみんなの言葉に助けられた。練習の時、体力がない僕はみんなについていけず、疲れて動けなくなってしまう。みんなの迷惑になっていないか、僕がいない方が良い記録が出せるのではないかと気にしていた。しかし、そんな僕に「大貴がいないと悲しいよ」と先生が言ってくれた。その言葉に背中を押され、僕は練習をまた頑張ることができた。体育祭本番で僕が引つかかってしまった時には「大丈夫だよ。気にしないで」「次はいける」とクラスの子たちが次々に声をかけてくれた。みんなの言葉に励まされて僕は最後まで頑張ることができた。もしもあの時に「お前のせいで止まった」とか「大貴がいない方が勝てるのに」などと言われていたら、僕はすごく悲しかったと思うし、学校に行けなくなっただかもしれない。今、学校に通えているのも、励ましてくれた先生や慰めてくれた友達のおかげだ。

言葉は、人を励まし勇気を与え、前向きに頑張る力にもなるし、人格を否定し傷つける暴力にもなる。僕はまだSNSをやっていないが、SNS以外の普段の生活の中でも、できるだけ明るい言葉を発信していきたい。すべて

の人が言葉によって他者を傷つける危険があることを自覚し、お互いを思いやる言葉があふれる社会になると良いと思う。

## 生きる

大泉町立西中学校 三年 カテカロ キエミ

「辛いな。」このようなことを思ったことはありませんか。生きていく上で一度はあると思います。私も思うことがあります。

私は、「生きること」をやめようと思っていました。「自分は周りに迷惑かけてばかりだから、邪魔なのかな。いないほうがいいのかな」と思ったからです。しかし、そのことが親にばれて、泣かせてしまいました。私はこのとき、「あ、自分、愛されているんだな。いらぬ存在じゃないんだな」と思いました。また、ユーチューブを見るとたくさんの方が慰めの言葉を言っていました。その中から特に二つ、心に響いた言葉があります。

一つ目は、「二部の大人達は、夢や目標がなんだかんだと迫ってきますが、無理に目標や夢を見つけようとして自分を苦しめることはやめてください。自分を見失わないで、自分らしく、自分のやりたいように進んでいってください」という言葉です。

二つ目は、「死ぬのは簡単だ。生きるのはそれよりずっと難しい。あそこで死ななかつたのは、何か意味があるんじゃないか。生きてみるよ」という言葉です。

この二つの言葉が、特にぐっと心に刺さりました。私は「生きることってすごいんだ」と思いました。そして、他人にとらわれ、自分を偽っていたこと、自分らしく生きていかなかったことに気づきました。

ただ、他人にとらわれず自分らしさを尊重するのは難しいことです。「自分のこんなところが嫌。なんでこうなんだろう」と思うことがあるからです。また、「この人のこういうところが嫌だな」と思うこともあります。人にはそれぞれ長所や短所、好きなことなど個性があります。それをバカにされたら悲しくなります。でも、しかたがないのかなとも思います。その人も同じ人間だけれど、性格などは一緒ではないのだから。

だから私は、他人に何と言われようと自分自身には嘘をつかないで、「自分はこうなんだ」と自分の価値や性格を尊重していくことにしたのです。そうしていればきつと、気の合う人に出会えることでしょう。また、自分だけでなく、相手の価値や性格を受け入れてあげることも大切だと思います。受け入れにくい時がほとんどかもしれないけれど、「あなたらしい」と感じるだけでも、相手のことを少し理解できるのではないのでしょうか。

「生きる」これは難しいことだと思います。生きている間は、上手くいくことばかりではなく、上手くいかないことがたくさんあります。しかし、私達はどんなに辛く、苦しくても、今を生きています。そして、お互いに助け合って生きています。だから、私は「生きているってすごい」と心の底から思います。これから先、辛いことがあっても、「生きているだけですごい」と思いながら、自分らしさを大切にしていきたいと思っています。

小学生標語

南小

四年 小林美結  
 五年 佐藤杏奈  
 五年 富田優凜奈  
 五年 小林悠愛  
 六年 石田琉花  
 六年 田口桜花

ありがとうの一言で みんな笑顔  
 つられないで その悪口  
 助け合い 人の言葉を 感じ取ろう  
 みんな違う 個性は自分の たからもの  
 いじめているほづがかっこわるい 誰かを救うとカッコいい  
 傷つけない 個性豊かな心を守る

北小

四年 白石乃心  
 四年 白幡乃愛  
 五年 湯澤晴翔  
 五年 野口春馬  
 六年 小沼朔太郎  
 六年 赤坂侑紀

ありがとう みんなが 笑顔になる言葉  
 ゆずり合おう やさしい心 大切に  
 ありがとう その言葉だけで うれしいな  
 広げよう 心の声を 大切に  
 広げよう 優しい声かけ 笑顔の輪  
 思いやり 小さなことでも 大きな笑顔

西小

四年 鈴木心絆  
 四年 宮本真優  
 五年 樋口直希  
 五年 右島采花  
 六年 高木結愛  
 六年 三浦柚月

いいところ 君にもあるよ その笑顔  
 笑顔さく すてきな言葉 広げよう  
 みとめ合い みんな笑顔で 「ありがとう」  
 自分の好きな色をぬろう  
 あいさつは 笑顔をつなぐ まほうの言葉  
 尊重しよう 一人一人の 輝く個性

東小

四年 澤里奈  
 四年 塩田未幸  
 五年 西岡賢佑  
 五年 関口三佑  
 六年 恩田侑実  
 六年 久保田莉乃

やさしさで 笑顔の花を 育てよう  
 みんなで 力を合わせて 未来を楽しく  
 休み時間 声をかけよう だれにでも  
 モヤモヤを 自分でためない 仲間がいるよ  
 この世界に 笑顔のスタンプ  
 一人一人 楽しく笑顔 生きていこう



## 平和都市宣言

平成 29 年 4 月 8 日 制定

大泉町は先の大戦中、空襲で多くの尊い命と大切な財産を失いましたが、町民の弛（たゆ）まぬ努力により、平和な工業都市へと発展することができました。

しかし、今もなお世界各地で紛争、テロリズム、犯罪などにより、日々多くの人々の命が奪われています。

私たち大泉町民は、戦禍を克服し、生まれ変わったこの緑豊かなふるさとを、未来の子どもたちへとつないでいかなければなりません。

大泉町発足 60 周年にあたり、平和を願う世界の人々とともに、永久の平和を実現するため、私たちは、ここに「平和都市」を宣言します。

## 人権尊重と福祉の町宣言

平成 6 年 5 月 20 日 制定

人は、みな個人として尊重されなければならない。

幸福追求の権利は、何人に対しても自由にして平等に与えられた基本的人権である。

わたくしたち大泉町民は、相互の理解と協力によりすべての者が、人権を尊重され人間らしく健康で文化的な生きがいのある生活ができるよう次の事項を指針として、真に自由にして平等な明るい町づくりを進めることを誓い、ここに「人権尊重と福祉の町」を宣言する。

- 1 人権を尊重し、支えあう力と心のぬくもりで、  
みんなにやさしい町にしよう。
- 2 高齢者をうやまい、  
健康で生きがいのある生活に手をかそう。
- 3 障害者の人格を尊重し、  
持てる力を発揮できるように支援しよう。
- 4 病弱者にやさしく接し、心の友となろう。
- 5 子供たちを愛し、  
心身ともに健やかに育てよう。